

## C. W. ニコル氏講演 「森から未来を見る」



### ～生い立ち～

私の国籍は日本ですが、生まれたのは英国のウェールズ。

ウェールズは、その昔、森林が約90%を占める緑の豊かな国でした。しかし、隣国イングランドとの戦い、ローマ帝国やノルマンとの長い戦いを経て、森林は徐々に破壊されました。そして、産業革命。南ウェールズは、良質な石炭など鉱物資源に恵まれたところでしたから、その採掘や工場の建設が進み、森林は急速に消滅していきました。私が子どもの頃には、南ウェールズの森林面積はたった4%になっていました。

石炭が出なくて開発を免れた小さな森林があり、いろいろな動物がいて、きれいな水が湧いていました。子どもの頃はそこで遊んでいました。しかし、その森の周りはずっかり裸になっており、周りはボタ（石炭の採掘に伴い発生する捨石）だらけでした。そのせいで、川はずっかり汚染されてしまったのです。

12歳の頃、イングランドの学校に入学し、ロンドンにも行きました。ロンドンの街は、大気汚染がひどくて、スモッグで昼間でも4,5メートル先が見えないほどでした。テムズ川もひどく汚れて、魚が棲めない川になっていました。

小さいときから、豊かな森に親しんできた私は、すっかりこの国がいやになりました。また、自然を守れない大人たちを尊敬できなくなりました。

そして、北極探検家になることを夢みるようになりました。

### ～北極へ～

17歳の時、カナダに行っていた恩師を頼って、初めて北極に行きました。

なぜ北極だったのか。北極は、人間による開発や汚染がなくて、昔のままの自然があり、そこに住むイヌイットは、厳しい自然環境の下で、自然とうまくつきあいながら穏やかに暮らしている民族です。そんなイヌイットにあこがれを持っていました。

8ヶ月間滞在。最初先生の手伝いをやって、そのあとはイヌイットと暮らしました。その暮らしの中でいろいろな体験をし、イヌイットへのあこがれはさらに深くなっていたんです。

その後英国に帰りましたが、我慢できず、すぐにまた北極へ行き8ヶ月滞在しました。そして帰ってきたときは19歳。母に勧められてカレッジ（先生になる専門学校）に行きましたが、どうにも馴染めませんでした。いろんなできごとがあって、学校をやめました。

そして、カナダの越冬隊の探検に選ばれて、19ヶ月間の探検に従事。終わったら22歳になっていました。

### ～初めて日本へ～

僕は14歳から柔道をやっていました。その縁で、英国に正しい柔道を教えるために

日本の講道館から派遣されていたすばらしい日本人と会いました。その先生は、言葉や立ち居振る舞いがすばらしい、本当の紳士でした。小柄でしたけど柔道はめっぼう強い。私は目から鱗が落ちる想いでした。そして日本に対してよい印象を持つようになったのです。

それで、柔道や空手をやりたくなって、日本に来ました。22歳のとき。昭和37年です。

そして、空手に打ち込みました。でも、大自然の中で長く過ごしてきた僕は、東京の喧噪や人の多さに全く馴染めませんでした。心がすっかり疲れたとき、道場の仲間が、山に連れて行ってくれました。“かんじき”を履いて、冬の山々を歩きました。その時の森林が本当にすばらしかった！こんなに人口の多い国（当時の英国の2倍くらい）で、すばらしい森林がこんなにあることに本当に感動しました。

何で日本はこんなに森が残ったのか、考えました。仏教だからか、それだけじゃない、米文化、田んぼをつくるためには良い水が必要だ、だから森を大事にする。また、大量に家畜は飼わない。そういうことだろう、と。

空手の黒帯をもらうまで、2年半日本にいました。その間、いろんなところに旅をしました。それで、本当に日本の自然を大好きになって、その自然をつくった日本人が大好きになったんです。

その後、日本を離れて、カナダやエチオピアなどで自然に関わる仕事をしてきました。

## ～再びの日本～

40歳の時、再び来日。友達のいる長野県に住むことになりました。森のことをもっと知りたくて、猟友会に入り、地元の猟師と一緒に山々を歩き、いろんな話を聞きました。1日にクマを4頭見たこともありました。この日本でこれだけの自然が見られたことは驚きでした。

しかし、バブルの波が押し寄せ、大きな道路ができて原生林はどんどん伐られていきました。そのあとには産業廃棄物などのゴミを捨てられて、川には砂防ダムとかができて…。地元の人たちは怒り、悲しんでいました。それで僕に、「マスコミに言ってくれ」と言うから、国にもいろいろ言いました。テレビにも出してくれたから有名になってしまっただけ…。知床、屋久島、西表島そのほかいろんなところに行って、この豊かな自然を守ろう、と訴えました。しかし、自然破壊を止めることはできませんでした。僕には何も変えられない、どうしていいかわからない。最後には、もうこんな日本を見たくない、と思いました。

そんなときに、ウェールズ政府から、「ウェールズは変わりました。見に来ませんか」と声がかかりました。帰ってみると、昔裸だった山々には青々とした森が繁り、わき水も出て、「アフアン・アルゴード森林公園」として美しくよみがえっていました。森林面積は60%になっていました。

人間は自然破壊もするけれど、愛情と汗と知恵があれば自然を回復させることもできるんです。知恵がなかったら、知っている人に聞けばいいんです。

## ～「アフアンの森」づくりに取り組む～

ウェールズから帰って、森づくりをしたいという自分の気持ちを仲間に話し、協力してもらえることになりました。仲間には、若い頃から炭焼きやきこりをして、森林に対する知恵と愛情を持っている人がいます。

これから私は放置された山を買い始めました。

最初買った山は、放置されて暗く、木の病気が入って、雪で折れて、ゴミもいっぱいあった。もともとあったはずのブナも消えていました。

まず、林内に光を入れるために間伐をし、倒木などを整理し、ササの刈り取りなどをしました。そしてブナや元々生えていたであろう樹種の木々を植えました。その森が今では見違えるようになっています。



森をよくするためには、光が林床に届くようにすることが大事です。光が林床まで通ると、下層植生が繁茂して、花もいっぱい咲きます。花が咲くと昆虫が来る、昆虫が来ると小鳥が来る、小鳥が来るとタネを落としてくれます。木は元気になるといろいろな実を着けます。そうすると動物が戻ってきます。動物もまた、植物のタネを持ってきてくれます。きのこ類も増えました。



また、森の中の小川が流れなくなっていたので、埋まった土やゴミを取り除いて復活させ、小さな池も作った。川や池には、多くの種類のトンボやカエル、水生昆虫が帰ってきました。

巣箱も設置しています。木が大きくなってウロができてくると、こういう巣箱は必要ないけど、そうなるまでは、必要だろうと思います。今、フクロウやいろいろな小鳥が住みついていきます。



今、アフアの森には、絶滅危惧種に指定されている生物がたくさん生息しています。

人が大勢訪れるようになったので、道にはチップを敷きました。チップを敷くと、森にも良いし、歩きやすいし、香りもいい。伐った木は、シイタケのホダ木にしたり、炭を焼いたりして利用しています。大きな木の材は家具になりました。漆塗りのりっぱな家具です。



アフアの森には、いろいろなお客さんがいらっしゃいます。チャールズ皇太子、高円宮妃殿下、いろいろな国の大使がみえました。そして、天皇・皇后両陛下も来てくださいました。とても嬉しいことでした。



アフアの森の隣に国有林があります。手入れされてなくて、荒れて、真っ暗な森でした。私たちは、これを整備しようと考えて、国有林と話し合いをし、5年前から手入れをしています。間伐をしたら茶色だった地面が1年で緑になりました。たくさんの種類の植物が戻って、昆虫が戻って、鳥や動物も来るように

なりました。残ったスギもりっぱに育ちます。木材の搬出は、山を荒らさないように、道路を作らないで馬でやりました。最初は、遠野から馬を借りてきましたが、3年前から自分たちで2頭の馬を飼い、馬搬が出来るよう訓練しています。

### ～アファンの森財団の取り組み～

アファンの森は、多様な生物が生きられる森にしたいと考えています。また、いろいろな調査もやっています。だから、教育の場所にもなる。学生たち、子どもたちに、森のことだけでなく、何が食べられるか、また、悪天候の中でもちゃんと火を焚ける、そんな、生きるためのいろいろな知恵なども教えたい。

#### (ファイブセンスプロジェクト)

森は何よりの癒しの場所です。私たちは、心身に障害を持った子供たちをアファンの森に招待しています。森の中で遊ぶことで、彼らの心が開かれるものと信じて…。

目の不自由な子には森は危ないじゃないか、と懸念される向きもあります。しかし、彼らは目は見えなくてもほかの感覚がすばらしく優れている。森の中で、少し教えてあげるとすぐ理解する。子どもたちは、五感をフルに働かせ、植物や動物、川、風、小鳥の鳴き声などを受け止めながら、楽しく遊んでいます。本当にすばらしい笑顔を見せてくれます。



今、日本人の心には森が必要だと、僕は思います。

#### (自然欠乏症候群)

最近、学校や幼稚園で、落ち着かない、集中できない、すぐ切れる、泣く、友達ができない、すぐ転ぶ…、そういった子供が増えています。そうした子は、大きくなってもうまく社会に適応できない。脳などの検査をしても特段の異常は認められない。



その原因がわかってきました。「自然で遊ばない」ことが原因なのです。「自然欠乏症候群」と呼ばれています。

子どもは、生まれてから、五感を使っていろいろなことを吸収し、学びながら成長していきます。森で遊ぶと、五感が発達し、知識や知恵が身に付きます。また、森の中ではいろいろなことを自分で判断しなければならないので、判断力もつきます。最近の子どもたちは自然の中で本当に遊ばなくなった。五感を使わないから、心で見ることができない、感じるができない。

この自然欠乏症候群は重大な問題です。僕たちは、子どもを森に戻す義務があると、強く感じています。

#### (東北大震災復興支援プログラム)

東北大震災のあと、あの悲惨な震災の被災者に何かしてあげられないか考えました。そして、子どもだけでなく大人も、アファンの森に招待することにしました。

東北全体に招待状を出したんですが、震災から3ヶ月しか経ってないから、なかなか、みんな来られない。東松島が最初に手を挙げてくれて、27名の方が来てくれました。

子どもたちには、少しアドバイスしてあとは見守るだけで、自由に遊ばせました。森

に入ると顔が変わり始めます。1時間もしないうちに無邪気に笑い、走り回って遊んでる。この様子を見て、大人のすごく疲れたような顔が明るくなったんです。

3日間の滞在が終わったとき、「小学校が破壊されて、高台に移ることになっているので、学校を造ると、周り森を子どもたちが遊べる森にするのを手伝ってください。」と言われました。

そして、役場の人を始め地元のいろいろな人と話をしました。また、森に手を入れる前に環境アセスをやり、その森の可能性を確認しました。

この森は暗くて、着手してみると思っていた以上に大変でした。ボランティアや子どもたち、年寄りも来て、手伝ってくれました。最初に作ったのはツリーハウス。子どもたちの心の基地です。全部地元のものを使いました。それから、展望台を作りました。この展望台から、学校が造られているのが見えた。自分の破壊された村も見えた。遠くに海も見えた。森の音を楽しむ「サウンドシェルター」も作りました。森が明るくなって、花や動物が戻ってきました。

学校ができました。木造です。全部東北の間伐材でできています。子どもたちが初めてここに入ったときの喜びの表情は忘れられません。先生たちまで明るくなりました。

近くに海があり、田んぼもあります。海で遊んだり、田んぼでいろんな勉強をしたりしました。ガス、電気がなくても生きられるということなども教えています。



### ～終わりに～

私たちの森づくりのコンセプトは、多様な生物が棲める森、そして人と共生する森。こうした考えの下に、アフアの森づくりをさらに進めるとともに、多くの人たち、特に子どもたちに森とふれあってもらう活動 - エコツーリズム - などを進めていきたいと考えています。

講演は、映像を交えながら1時間を超えるものでした。

そのため、この講演録は、講演者の意図を逸脱しない範囲で要約して掲載しています。

また、写真は、アフアの森財団の承諾を得て掲載しております。

(文責：(公財)かごしまみどりの基金 常務理事 竹ノ内 洋行)

**複製、転載は固くお断りします。**